



土木の力を使った高松城の水ぜめ



秀吉の土木をつかった戦法は、備中（いまの岡山県）高松城ぜめにはっきりと見てとることができます。この高松城のまわりには深い沼地があって近づけませんでした。



備中高松城 毛利氏と信長は天正5年以茶館討ち、天正10年5月毛利元就の孫、清水宗治がその拠点の城を守っていた。



そこで、信長の命令でこの城をかこんだ秀吉は、農民から1俵2百文、又は米1升で土俵をあつめ、城の西南に長い土手をすばやくつくりました。くすくすしては敵にさとられ、雨の時期をのがしてしまうからです。

10日ほどで土手はできあがり、秀吉は川をせきとめ、堰をきって水を城の方に流しこみました。やがて、城は湖の中の小島のようにぼつんと浮かび食物も武器も運べなくなりました。困った城主は約ひと月後、秀吉と和議をむすぶことになりました。



| | |
|-------|--------|
| 土手の長さ | 2.9km |
| 土俵数 | 635万 |
| 工期 | 12日 |
| 費用 | 45.4万円 |
| | 約83万貫 |

農作の水がめ 満濃池

満濃池は香川県にある大きなため池です。雨が少なく、急な山地のこのあたりでは、農業の大切な貯水池でしたが、弘仁9年（818）ころ、その堤防がこわれ、あたりは大きな被害をうけました。

空海が改修したころの満濃池（北西部から南東を見た図）

崇徳年間（701~4）讃岐の国守道守朝臣がつくったと伝える。



空海改修構造の特徴！

- ①弓状のアーチ型をした堤（水の圧力に強く、こわれにくい）
- ②しがらみをつかった水ざわに木の杭、枝葉をくくりつけ水の勢いを弱め堤防を守った。
- ③余水吐き
ため池がいっぱいになったときにここから水をあふれさせて、堤防がこわれるのを防いだ。

土堤の長さ（下部）18m
（上部）81m
高さ 22m

底樋管（柱のくりぬき）

山七郎、藤野、吉野村にまたがり、見張り距離約10km。このため池は約4万平方メートルの33万人を養育する大工事のうち池は10万人分の工事を行ったと推定されている。

役人が修復しようとしたが、集まる人も少なく、工事もうまく進みませんでした。地元の農民や役人の願いで、空海が工事の責任者となり、弟子をつれて弘仁12年（821）満濃池にやってきました。

池のまわりに集まってきた農民たちに空海は、農業と水の大切さと工事のやり方をわかりやすく話しました。心をひとつにした農民たちの働きによって、わずか3ヶ月で池の堤は出来上がりました。この土木工事によって、人々は米づくりが国をささえる大事な仕事であり、その水をためておく池の工事は、農民のくらしと国をささえる大切な仕事であるとはっきり知るようになりました。



農民に工事の大切なことを説く空海